湯川記

291
63

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03989

291
63
1

中根文庫

湯川記

県立串本古座高校

昭48.10.21
3989

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号 03989

湯川先祖の事

能野湯川の先祖を尋ぬる不甲斐源氏新田三郎と云る有り
箭の道に達し名高人にて有けるか家人の讒言により勅
勘の蒙り能野に湯川と言所に遠流せられ年月を送り給ひ
しか其比能野に熊徒有て近邊を掠領し能野善詰の貴賤を
悩ます民の煩とおりしかは討手下向しけれは山林に隠
れ居たりたく書に曰る新宮中所に新田三郎邸跡か長し
ぬる人なりしかるに此の熊徒を誅伐し張本のかしらを取
京都へ引まいらせけるかよりて恩賞あんとて勅勘をさ
れ室一郎を賜り当養の内柿といふ所に居住しをる。けるを
子孫代々室郎を相傳しける湯川孫太郎とかけるい後醍醐
天皇の御宇にて天下大きに乱る方の御新田左中将楠判

一新宮城の城主
一熊野川まいりせ
一本宮の内柿
一本宮の山岳
一本宮の山岳

吉正成武家の大将尊氏と合戦止む時なく紀伊国八幡の湯川左衛門尉貴志荒川湯浅田辺別当其他世に名有士い皆宮方に属し之を動乱の時に殺す寡に薄太郎如何思ハきけん尊氏に属し功有り尊氏の世となりて有田日高室三郎の内賜り紀州の主たる頭として小松原に在城して代と長利公方に法かへるを

湯川民部少輔直光教興寺にて討死の事

湯川ナニ代民部少輔直光の代に富山宮内の子息右京大夫殿と云人有河内泉州紀伊三ヶ国の守護職にて河内の国高屋に在城し給ひける湯川を置ハ出仕を公方に殺害殺の後下やすの外の士ハ河内無理湯川猛下にて高野へ出仕したりける其中に好隆大夫ハ叛逆により当政宮国

続意に後記、大三、ミ宮殿紀州諸ノ場アリ永禄元年此ノコトより今(天八七)に至ル此ノ事ナ、コトアリ

へ下向し給ふ湯川を頼まれ根来寺の衆徒を共に引ふ(紀伊国)ヶ三ヶ国(河内和泉)の勢を借勢千の軍勢を引くし泉州久米田に陣を取り三好修理大夫かたに

三好ノ戦場三好康長、日蓮興、日秀殺、日定逆、日隆逆、安宅冬康毒、安宅冬康毒、松永弾正殺逆、元亀元年ノ事也

敵し飯盛の城を二重三重に取巻て卯月五日より十九日迄手いたふ責けれ共名城にて要害堅固なれハ責あくみて見へける所に剛三好か金剛摂津守大将天王寺表へ出し戦けれい叫ハーと如思いきけん当政宮屋へ引取けり

三好ノ敗軍ノ事

る間に飯盛より教光寺へ出張し宮屋へ入られんと志をひけれ共摂津守ハたとられ今ハ叶ハぬと覚て定郎左衛門に向てけふこそ神おろし景勝なれハ敵の後を見すくやうに摂津守を討とれと下知せられける間長沢郎左衛門五郎左衛門ハ一つやうの渡辺の手きりにて

めけつめさんく打ける矢庭に十六七騎射て落し矢種
盡なれハ大音の中へかけ入て能前あまたに打取り折死をそ
志たりける直光是を見給ひて是程ひてきめやすものとて真先
にかけ入をくいに其手の兵共大将を討せしと我先にと大
音打つて入乱れ入てたゝかいける おめきさけぶ声新
の鉄炮の音おハ大山も崩まと力長刀のひらめく影ハ雷光
のごとく敵をセハ攻迫まくり暫く息をつきもあへず三好か
頸を見さらつるとて遺恨なき仇敵を討またるそと見給を
お頼ちたる一族良經迫手討まけまいと命惜ミ給て何かせ
んと又新の中へわつて入切死おそれひける 澤川家ハて
ハ直光を始として同苗常力 澤川右衛門大夫光房 助親也
同苗を支清上野同紀伊守 泉佐共ハ七騎三人同主ハ目良兄

第山陰十三郎神保安宅新助父子黄石白柱富田飯沼九郎左
衛門敵神形部丞外彼是五十四人根来寺人數二百余うたれ
ける三好方ハ勝軍志ハ一族京兆共多く討
まける高政方ハ今ハ力おく目良左京亮ハ高屋の城を
かれける

秀吉公澤川山本迫沿合戦之事

天正十三年秀吉公大和大納言秀長公羽柴中納言秀次卿従
軍按万余騎を紀伊国迫沿と打て又向ける三ハ方ハ四ハ方根
来寺を攻落し同ハ太田の城を取巻て三方ハ堀をつき志野
川をせきかけて水責おそれける能登ハ何程堅固ハ何程
藤久右衛門尉海陸より乱入澤川五郎左衛門直秀ハ什て三郎
左田日方 在田日方 手妻 ハ頼しかれ原ハ城ハ有りしかを秀吉ハ討手向ふと

二時日を延延とす出仕
日々文象を通じ象
ケレリ〻象を大に怒り
ヲ
トアリ明年十三年三
月ノ死外交よりせ

し国々しかいにて一旦良策を集計を以て合戦をせず致す
秀吉公へ従ふと衆口まちくまりかゝる所に根来太田小責
落され熊野へよると云けれ共場に水軍の怖へ集りける
人々われ湯浅権の守宗治石見丞下野義伊豆守初入道宗に
対部の大夫神保市垣清白樫津村新神脇田岩代山地墓川日
良愛須万呂横矢真砂安岩風条見小山言屋玉置さ人も聴き
一本言屋言葉ト
了

軍評定とり〻也湯川安芸守直春
談合したり直春詞面有て
たいさめてやれけれ共いかに大不敵と云々みれんへた
り其上秀吉公は天下を会さいきやとおれは中く経運
を開かん事わたのるへし日比申如くとおもはくるも秀吉
帰へ随ひ奉へしさあらんかおるてハ長く湯川の家たも
へかり去を家を全ふ事あるへ事とハ如何お

ひとりとのたまへハ直春申されけるハ富家ハ未田添氏
未流といて富田ハ伝ふ事根来衆ハ代々三代未来勇
の名ハ代々名を一戦ハ遂ハ降参せん事ハ代
の恥辱中ハ知ハ名を祖の名をけかすハ似たり比
比申如く海上ハ兵船を出し陸ハ藤代無坂庵か湊切所く
へ人数を出し山林ハ伏兵を置て敵を来いハ有所を知られ
ん打籠思ひ寄ハ所より外ハ内知ぬ上方勢ハ
ふまハかけ知ぬ一方年ハ勇敢ひ上方を運ハ
まくしかるハいかおとの云けれハ何も仰を同しけ
るさあらハ急ハ新宮へ出張ハくしと海陸の手ハけを敵
ハ富ハ早有田雑賀の逸ハ前の山ハみちくたるハ
くく申表けれハ陸ハ長代の坂海ハ比井三穂の沖等手雲

霞のことくを見へし直春は不和との長詮諭か教か難所を取
られいかゝ出くまを いゝて方々かとし甲斐くを知き苦詰守
申されけるいかゝる大軍を引受何の手だてもなく此城か
ていかゝ有へきか 有ては苦しつく熊野の奥へ引籠所か
待を敵へし早くと進めける直春も力無さ小城か火をか
けもて霞共か焼あけたり去たるくし書なおさるきを小
皆山林か隠しける取まを取あへず急き落ら北けか相随
ふ侍か小湯川安芸守直春伯父也 同兵部大夫 城主の伯父也 同式部大輔
伯父也 同治部の大夫春信 平井掃部寿 熊谷右馬充 広春 脇田
三郎左衛門 俊清 同藤太 俊勝 津村式部 信春 岩代右馬門大
夫同 藤吉田外記 林源右衛門入道春宗 栗山三郎次郎 玉井新
兵衛尉 其勢百余人 三月下旬か十松原なれ出 去夜は義治

の城か旨有多ふ赤敵駆より寄来きこへけれは 去の
あれ明行は諸山か分入忍ひ日も暮夜か入けれ
ハ鐘の鳴をかたゝ 其夜は山か明しなる 直春ハ脇田三郎
左衛門を近付ハ 先落人の身とかりて たゝへて言へ 去か
はあらかとも 杉山の部 本か かくは信へ 運つきさし
い給か 天下を治めなふ我 と い 天か せより地か めきを 身
で家へ 去 所 又運を同 かん事有へ かり 口惜 き事か
お 藤代さいかの おたりを 歩 し 痛 言 葉 で いく 叶 ま
い 小 松 原 の 城 を 快 と して と 去 し かくおれ 為 へ き 乎 の 長
全 能 か 日 数 を 責 し 今 不 を 取 ふ 盗 か と の 多 く ハ 脇 田
此 由 来 伝 尤 あり 去 り あ こ ら 何 を 方 の 手 せ ら ふ へ き 位 人 ハ
名 こ を 惜 ら ふ ハ 先 行 方 へ 小 原 佐 藤 所 か 新 左 衛 門 尉 待 受 命 を 張

りかの天運に任せらるべしと申されいさぎよい西郷殿六郎
が方に参謀出くしとのなべて大勢いそぎ
走り行六郎かくと申ければ軍かの始末見届しかへし日比
の恩に報ずる命を捧ずべしと勇ましく家の重宝引ても
かたみとそい参けり脱田い先かけなけて薩山に参二心
なき由申ければ直毒大き筆捨し給ふ故て樟先生か銀へ
入るふく数を集め可鉄砲を揃用心者数見たり日良清左宗
ハさきを清僧ら未業とて変やかしこまて計きかくの
嘲も有へしとて手者計かて秋佳川宋の幸か陣か前より
せい一郎しと上方者か手柄の不とをあらあり昨日切名
を隆代か剪めてこそとおもひ雲て切けれ郎あいてたる
分色ハおこりける家の大将か伝石橋左衛門久吉の

日良清左宗幸か陣に移り

藤堂紫右衛門幸清左衛門左三門幸野若狭守青木高右衛門若
狭守青木三郎兵衛藤堂郎田辺に押寄神社仏閣に至一宇も
残さず焼はらひあきれ一かりけり次第也者たるも是ハ
任せ山林ハかけ隠ハ多い焼場の原ハこそ他国ハ
乱るといくとも無事の内ハ高ハかり合事とハ事合ハ
のみ別して今かハ乱出来けれハ妹のをを散をかかくて
ハ親を捨ハ親ハ子をしらぬ貴賤貴山ハ逃迷ふ目ハあてら
れ故有様世者ハ天下や取ものハ多のくを殺しこそハ仏
神をこめまひたまひ給ふ神霊仏ハ焼拂ハかり次第
也先山本を攻つかせとて一の激いハ城をすを大将ハて
長宇山を内川ハ方を攻つかて責上り三宝寺前の田畑ハ陣を
取御牛城と申ハ龍松山を後ハ前ハ北嶺ハ方を宮をはい

一ノ渡藤ニ攻ル
山本攻

臣宇山三内、大内
宮ニ陣ス

一説ニ千五百騎トアリ（新書御内上ニ）二千ニ別ル
ル五百騎ツヽトアリ

ち三方沼にて禁の竹篠等をけり前の川原に出る十町ほど
一すぢ張川の中方に拍へける山本樵夫新田内匠井岡清助
形部三人兼廻し鉄炮おせる家来の方に足軽を出し鉄
炮おすけこるかりる所に青毛の馬に乗たる武者足軽に
郷し鉄炮をおせける所を敵畑福左衛門尉取つておちゃ
わるる計もきたほりひよやうとおちけるかむかを射
ぬこれて馬より下るとこと三位成に至て馬を成馬に乗
卯花おどしの鎧着たる武者一騎射落敵を見腹を立て川を
渡さんとたりけるか水の深さを知らさりけんかし猶強
のりて拍よる所に能代左近と川端に立家来梯代川をすて
大川と申るにあつわとも折節山嶽に雨やふりけんまた所の
谷の水落てみなぎり水家をたたーたり翌朝に成川の水

山中樵夫ニ教ヘルシ井岡共ニ山本ノ家ナリ

騎馬ノ武者ハ年候十ヨリ上ニ

次日三栖方ニ年候大ノ切ル

左近三郎

先案内知らぬ人有ま共某聞ふてはたやんと思き馬
又乗掛おとしのよろひ着て先立て渡りけるその時聖婦
部銘木左右門金松喜助其外の侍衆おとらじと一度かさ
つとお入向の岸かけ上り鯉代左近の塚山井に落る者
有れ人馬を公へ隠を強代鄙に賜たりそ運を用みん若
思ハ古今ハ第ハ依て軽しをく敷軍して名を武さんとお
ふふ計也和と思いん者ハくみて然野武士の手柄の程を見
るへとて敵の中へとかけ入寄手方に井原三左衛と名
乗暫しか太刀を抜て強合ちつとも傷せを井原を敵の前
輪子河内也首かき切高く指上ケ時管に首を何やせんと
て敵の方へ投やりける寄手を見て一騎もそしさを討取
きとて追つ返一つ取ひけり命生きて又いつの世をかいる

一話ニ曰ク聖婦部銘木左右門(左右ハ左ヲ)松喜助(ヨキ)トセルアリ)ト有リ

一話ニ井岡清助ヲ何ヤカセシカ知ラズ敵ノ中ニ投ケ込ミシリヒト有リ

服部ハ実手ニ男士也

一説ニ桐野ハ実手、深見ハ味方ノ姉ノ聟ニ付話有ラン

へきを見かねて一ぢくひかせける山本一蔵宮
手と聲くらべ高瀬源兵衛七郎同上五郎太夫と深入りして討まけ
る寄手の方にも服部甲斐守同上右京亮を討まける柳の原
作ハ大将の中へ欠入水人ありぬせ五人が手を負せいきおひ
こつて吾たりけるが闇見又太郎と鑓を合せ実合しが川
端にて孫作又右衛門に討れける上方者ハ一の上ハ責寄りお
やきやけんと責かける味方ハ川を後にハ置ける一ぢと
刀へき様ハ無不くる所ハ切合たり是を聞て敵方と分跡
をさへ切ふ如く方鉄炮を打かけきハ方とひと者
出方。より敵多く出けるを見て叶わじとやおもひけん味方
の手負を助けを銃後宋ハ三宝寺へ引取胡麻井太内茶ハ
陣をを来たりける上方者手負死人多かりけり四月朔日近

一説ニ味方ハ旦三郎左衛門、真砂次郎

京七郎ト兵衛又三郎ハ寄手ニ討死トヤ又五郎左衛門ハ前夜甲斐ニ使ヲ寄死ノ賞賜ヤリトアリ

露村へハ仙石権兵衛屋藤次右衛門藤堂与右衛門藤堂五
百騎ハて向ける淀川ハ堤見峠ハ鉄炮を構へ待かけ
たり敵を見て言甲斐なく小松原ハ敵ハ向ハけ高ける淀川
いつくハかくれ居共何なりとの事ハ有ら人騒ちらせとも石
ひこ色を出て上る所を近かくと矢叫る汀受田畑ハ太夫
助田六郎小方向左近林兵庫ハ寄ハ射ハ布けれハ伝左
ハ次とつよかりける近藤百姓ハ木の下者の陰より横
合ハ鉄炮をさかちかけ、れハ馬合ハひちりさんと寄
ハ一騎打の細道事ハ谷をへたてたれハかけちらを事叫
ハ其ハ的ハ成てを討まける強ハ山ハ馴たれまま共ハて寄や
ハ一こハ馬ハつて思ハ左ハ成て
引色ハ見へける所ハ直春の良徳島右馬丞西井新右衛門

掃部加藤大蔵清村高垣一度かとつと話を聞下りかを追おろ
しけれい上方勢多く討まて禁をやして迎たりける此時伊
右衛門衛藤久右衛門やうく田辺へ引退しける相こそ直
春も小松原の恥を雪かれける此合戦小部名有士多討まけ
る味方おも田中重太夫他馬おと一騎賞千と称し者せ多く
討まける相其後部ハ田辺おハ一所子集り居て本おとの負軍
おそ手毎まかくる事まなく少しく人数を出し小せり合計おて
もかい敷合戦もおすりける今度ハ大軍を以て先山本を退
治をくしと又近隣をハ山林おハ火をかけ焼討おやせん又薬
内者を中部の在所を見定山くを集り地内へ追込てやお
ハれけんたつへこそ引きける京手を同敵を去たる

一本下川へ引かれける

一注ニ主膳殿ハ黒柳由ナルヲ下川村ニ別移ヲリ山下ヲ故ニ下ノ下川ナリ

一本たとひ実伏地辺迄ニ云と
一本かぶやり川云と

一部ニ山本兵助と下り小野村、浪部ハ山

此上ノ部書大異田上意ハ氏ノ著
就相城ノ田上氏ノ
部事ノ事

寛明川ノ東ノ
野ヲ主膳殿
下川ノ野ニ云
ノ隙ト太鼓ノ鼓ヲ
恥ちつて、いはせち
つてあり

て追かけたり船屋伏野辺迄追て追詰取一の槍を恥を雪け
とを申ける山本ハ銀やハを渡りのそきの杭を引をそし徐
かけたり山本平助鉄代深るるとおもはる鉄
砲をもそしく打をたり大勢討ハ引ハ行へき
とも見へさりけれハ部おを引きるとて去出
たる事をおく又田辺へ引退ハ大軍おれも薬内
をハ知味方ハ小勢おもとも心を一ハ引て志こ引陣所お
徐てみて引ハ引ハ毎おハ勝をしハ事お
し山林ハ地ちつて敵おを知りまを事ハ夜討小仕兵粮
を奪ひ陣屋ハ火を焼様と云手をるやうしける三月下旬ハ
七月中旬迄様と手を事て有けるして去出たた
る事なりける淀川ハ代ニ能堅を領し考ハ天下を合

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03989

掃部加藤大蔵清村高垣一度ハとつと敗を喫ハ追おろ
しけれい上方勢多く討まて禁をせーて逃たりける此時伊
石橋右衛尉藤久右衛門やり〜田辺へ川迄一ける相こそ直
春ル小松原の恥を雪かれける味合戦ハ敵名有士多討まけ
る味方ハ田中重太夫他馬ハと一騎當千と称ー者せ多く
討まける板垣後部ハ田辺ハ一所ニ集りて中不とのの負軍
ハ中間まかくる事まかく方ーへ数を出ー小せり合計ハて
もかい裏合戦まかうけける今度ハ大軍を以ー先山本を退
治まくーと又近隣ハ山林ハ火をかけ焼討ハやせん又藤
内者ハ中部の在所を見宮山くを取切懸内へ追込てやお
と評定ーとりーあまけるか山本も言ハとハ始終叫わしとや
おりいれけんたつべこそ引きける家手を以同敵を去たる

一注：主膳陣ハ黒柿り四番ニ引寄ル支
柄峯ニ木ある柿ニ
前ニ鶴村ニ陣所
詰ト迄マントを無ニ
此切場所余ル様ニ

一本たとひ実伏
地辺迄ニ云ニ
一本カ出やり川ニ

一詰ニ山本兵庫ト
下り
小野村、波村ニ
村ち

此ハ、孫書大系
田上憲四氏ノ著
能松城ト田上氏ノ
研事中
当田川京ノ会
海ヨリ主膳頭
下川ノ陣ニ
ノ陣ト太鼓ノ銭ヲ
馳ケ「ていハせち
つてゐり

て追かけたり船屋伏野辺迄追ル追結討取一の敵を馳を雪け
とを申ける山本ハ鎧ハ川を渡りのそきの柄を川をさく徒
かけたり山本平助鉄代ハ逆るるとハ法の木かくれ鉄
砲をきるくーお懸たり大勢討ハ一ハ行へき
とも見へさりけれい敵ハ敗をさくきるとて去出
たる事ハおく又田辺へ引迄ハ大軍ハれも藤内
を不知味方ハ小勢おもとも心ハ一ハ引て去ー陣所ハ
徒ーけて引ハまハ毎ハ勝をとハ事ハ
ー山林ハ地ちつて敵ハ有所を知りまを事ハ夜討ハ仕兵粮
を奪ひ陣屋ハ火を焼様と言手を取ハやすーける三月下旬ハ
ー七月中旬迄様ニ手を事て事ハ切ーて去出ー
る事ハ家ーける湯川ハ代ニ能登を領ー秀吉ハ天下を合

るいきおひの甚おそれをくしきわつるが無学の内にて考
先公へ願願しける事一様京後二心なきかへおりは考先
公の御ゆるし和睦おこと願おけり

湯川山本たとり殺され給ふ事

天正十四年二月廿紀伊国へ出て直春大和郡山にて
日数を送りをしかの同年七月小雨かひせられをしける山
山主勝佐八の城おも図書おの頼ヶ置玉置主殿助上表い死同
甚太夫同久左衛門同弟太郎左衛門家物太夫湯重右衛門同弟四郎左
衛門家物太夫湯重右衛門同弟四郎左衛門玉置藤十郎同弟藤
堂佐渡守居城川上城おへ入をしかの風呂屋おて沈殺五歳おを
て絶ひおの詩を給ひける事後一所おに集り在所をせしより角
有へしとおもひをふけていたりしをかく願ハ何十人い

一本湯川、山本殺害の事トアリ

綱正トアル：田上地田上吉京之助
一 吉を重
一 立ヶ左衛
一 当太夫
一 二十左衛
右弟万世田上筆
一ノ女書「新加城
ノ田上氏」ニ係ル
井手本

おれおとこの願ハ一人おも生佐渡守を詩死ゆんとおくをやし
て切て入筆て用意の事おハ大切かけ出中おおれハさん
くれを会生けもすりを弟ける三十四五人ちおせ大切おを
頂せ給ふ詩まて名を後の代おとゝ中おれ吉近死同上
おを願い死する出る人手おかゝるまとおけんと
大勢をちおせ言所おかけ上りきしちこくを死おける吉
おハをこをちぬけて詩を行深見又太郎言出山へ語行お
事場おをうたれ事る

泊りの城落る事

吉京ハ夜を日おついて熊野おを帰郡山おて春生かひの
事山本殺おて詩まをしをしの事又朋友の詩死の様ををくわし
く語り秋くも共おかく成へき事の言かひおく立帰りかた

一本峠ヲ越リトシ朋友ヲ朋輩トス

しかの面を向ける事かなはぬとも跡の事も四十とおく
て和身のまちをと返りてをやくと知らせやせんと苦心繁面
命おそろしく二度帰日おのりる事ロ惜き次第ともなみた
おかしやけるをを同人とおくあへと知れかりかしるを
と敵和睦をて不用お死をとくへきお敵のもうしこしおお
ち入やうしと計せやせし事敵とかを不覚悟やとくやみけれ
ともも甲斐もなく右京かを今かちまんと陣をかちまく陣をかち
んと志たりしを蒲山三郎拝留の其方計を君持たる身おと
し有間敷とも死命いさ泊の城か拝家敵後宇お陣かちせ
ヒのきやうをいふ奉らんと詞を相極めせ月晩日山本刑部
大手の大将として寄勢の面敵泊りの城へ寄懸たり城中へ
も敵寄ると同へしかハ上を下へとかへ下けるを折ふし原

一本孝義を振
まそらんと云
又一方きやうをを
をはくし孝らんき

在京根来寺の智明院根来を落て後ハ宮ヶ一ヶ小源泊し
つかかは毋の心地ちて敵へき島もなく居たりしかは陽治の
人おまきれつ、淀戸お遊て日を過しけるかは敵後守おいき
さかしたしむ事有て泊の城おを入おけるけ比のろかし
事おとかたりおくを義拝後宇情有つしいたりけれハ日
日を送りて所お又かくる事くを出来まりすくをを侍
の陣所おれ一方をみせきやへしを物具来て有おかけ
太刀追来人数引くし城の北の方三町計り隔し寺山峯と
り寄おて敵を待受いかかかたり総如何成る細有事けを
かく一揆をむをを拝後宇ヒもかひるる事たるるかを
るへし甲を始きて寄をを降参志々へ敵おく敵まも
かりを命ハ助へしとをやける陽明五郎宮牛右京お向

つて言はるゝ五郎左衛門を捕て討ておいたる悲もなく湯川山本
はとの大将をいつありたもかり討事や有度長寿の時の臣を
つすーめらまを君をつすーめらまといへる我
し命生て何かせん城後守をお取は根をさんきくし命ハを
の為お奉るかゞ孫ハ芳養の演ふさらきくしと喜先かけて
切てかゝる敵と策内ハ知つたり山本権兵衛鈴木刑部脇田
三郎名川宮右衛門移本治部おとらしと責のけける其後
からハ一騎と孫らをおあ化とて弓鉄砲をお合を後つきぬ
きハさんーかお合たり城後守はを知明院うたを
お原計をかと城内ーしも おたり原山三郎 酒井右京と鉄
を合宮合ーか原山つきふせがきを討きけ合松基以右を
つたひて後へまいり拵を右京をおそりける右京ハかゝれ

おき剛の者成りしかハ後ハ芳おを討きけ了知明院をを新雅
三郎を夫おかける寄手ハおひたる兵者共おれを命を
塵らひとり駆くしうたるき共場ともせを追ゝきけき
ハ城後守城内へ引込て木戸をとちてをおせきける寄手城
を原書を鉄砲をおかけ今雪の内ハ責おとさんとしみおを
んを責ハける日を暮方ハ俄ハ宮かきくもり雷山ひたゝし
くかりあくり風雨をけーく吹出海つら荒浪山のことくお
て岩をくたき寄勢ー敵を味方をおちおのゝきにハせたけ
おおくとも雨をこせくハ便なく天のまゝを待へしと
て家手かこ又ゞとまてのきふけり是といおをからけ手の
大将敵雅を遅参を一日の内ハ責落てへきものを相図相違
ノ延ハをける事ゝを合おれとつおやきけれ岩甲崎を

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03989

一本 洞奥の明を得たり心地して トヤ

おき袖後宇小洞奥の百姓。四地しして人数を集所用つきたし

人見へおけるを後をよきを力おく陽川山本の出来皆

りて みを出おきる

享和元年四月晦日於東武寓之

山本氏

原本ハ和奇山粉三図書館蔵の写本なり昭和八年四月十日

借受即日寫了

此日頃静代京都ヨリ帰る 慈覚 孝吉

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03989

「新右衛門と田上氏」
「一行第一之当ス下」
如シ
加賀地理等
正レサル如シ

塩見峠の合戦より上軍引揚まで

去る程小別軍仲重権兵衛尾藤久右ヱ門、藤堂典右ヱ門等二千五百騎を
率ひて五月朔日近森村より湯川、横矢から攻れ落さんとまっさを向き、湯川直
者ハ横矢文郎、真砂左司及安宅左近とカを合せ、塩見峠に出張りて陣を取
き居しが、二手に之を見て小松原を通過りたる湯川、何程のあらんと塩見峠
の坂を声を上げて攻り来れりの湯川方ハ田胡太夫、熊田吉兵衛門、小市郎左
近二人共手負ひて引き上げ、[illegible]

「新好城と田中氏」
「竹井」と「当ス下」
如シ
右書地理等ハ
正シキカ如シ

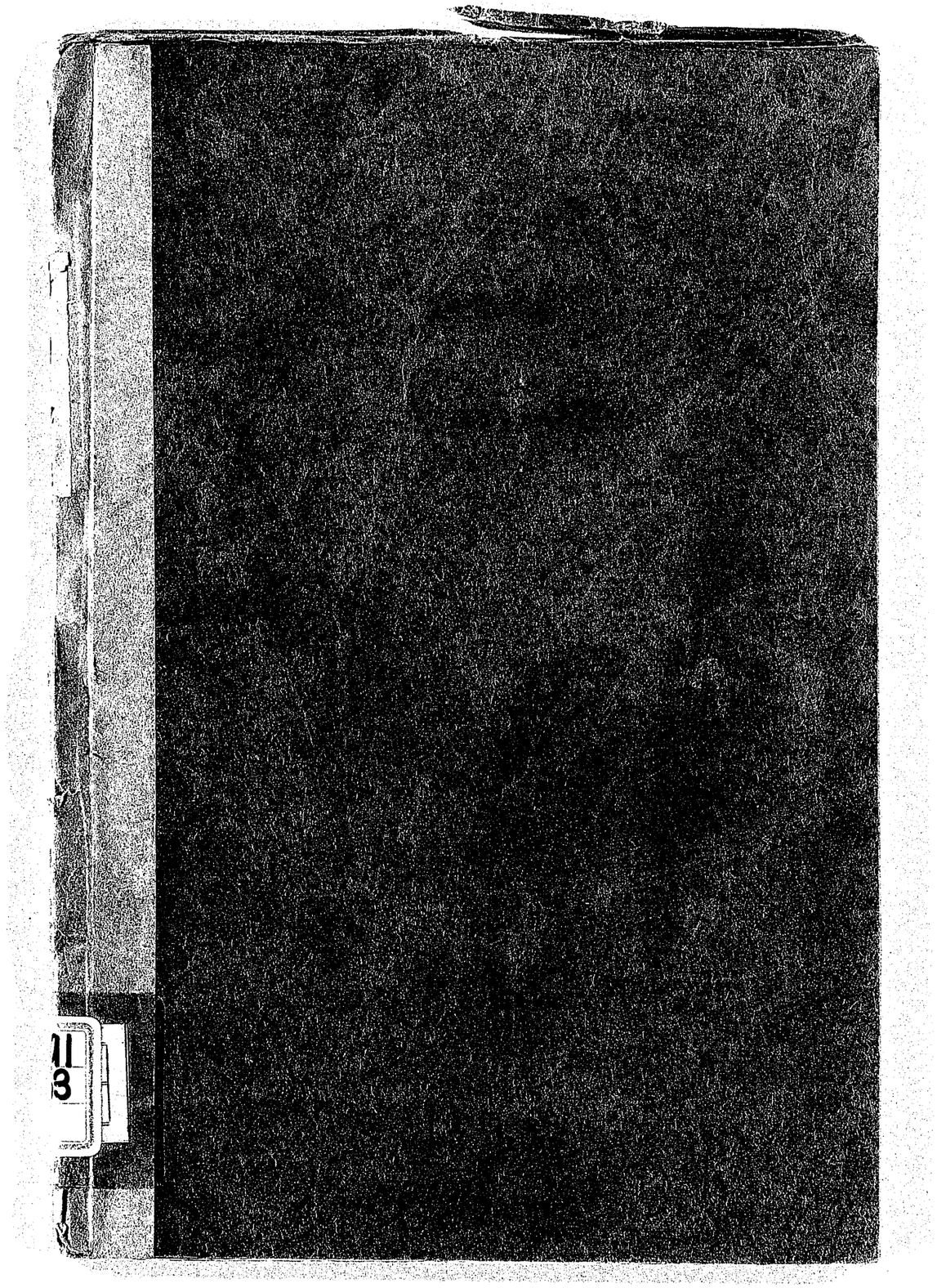
塩見峠の合戦と上軍引揚まで

去る程に別軍仙道権兵衛尉藤久吉二門、藤堂嘉吉二門等一千五百騎を率して五月朔日近郷村々に湯川、横矢が攻め落さんとするを聞き、湯川直春は横矢大郎、真砂左司及安芸左近と力を合せ、塩見峠に出張りて陣を敷き居しが、十余手之を見て小松原を迂去りたる湯川、何程のあらんと塩見峠の坂を寄せ上げて攻め来れり。湯川方は田胡太夫、賀田吉兵衛門、小吉田左近、林兵庫等矢先を揃へて射落せば、仇方一本も無く其上長駆百姓木陰ニ隠れ、弓矢を番へ、可鉄砲を乱射しければ、恰も的を射る様に賜く内に死傷多く築き、寄く所へ直春、逆さまに、進め者共と下知しければ、塩見峠の兵衆、一斉掃除、衣笠大蔵、津村、宇垣、丸山等一度に鬨を上げ追下し、皆詰め引詰め射下しければ、堂矢一本もなく、其上長駆百姓木陰ニ隠れ、味を絞る敵先きに逃下り、田辺に引退けり。湯川方は、横矢、田中等大夫、倶馬是曽の士討たれけり。

此度は山本、湯川勢は勢部なれども、地の理は明らかに山野を自由に馳駆出没し心を一にして敵を攻め、其度毎に勝たるに、宇手、多勢なれども地理不案内にて手負の捨し様も多く、攻め切る及、両軍対陣すること数十日、七月中旬に至り、寄手方は、「きと和睦の申出あり」、両家とも所領安堵の沙汰追つて致すべしと約し、貴き、杉原舞後守を立て世宜き、金軍都を立て引揚せきこと必定止まれ。其後山本主膳頭は其儀下川村に引籠り、湯川直春は田辺寄三ヶ荘へ、宮居し、何とも家中面々へ、先つ暇を賜り、時の至るを待つこと、せり。

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03989

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03989



県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03989